平均初婚年齢を過ぎた未婚者が抱く
結婚に対するイメージの研究

甚　五　文　子

臨床心理学研究　東京国際大学大学院臨床心理学研究科　第 19 号　抜刷
2021 年（令和 3 年）3 月 31 日

平均初婚年齢を過ぎた未婚者が抱く結婚に対するイメージの研究

甚　五　文　子

目　次

Ⅰ．問題と背景・目的
1．問題と背景
2．目的
Ⅱ．方法
1．調査協力者
2．調査方法
3．調査期間
4．調査内容
5．分析方法
Ⅲ．結果
1．結果図
2．分析結果
Ⅳ．考察
1．養育環境による影
2．家族を築くための結婚
3．パートナーシップとしての結婚
4．社会の枠組みとしての結婚
5．新たな結婚の枠組み
6．未婚は選択されたものか
7．未婚者の声に触れて
Ⅴ．今後の課題

要　約

日本は少子高齢化に直面しており，晩婚・未婚の増加が主な原因と考えられている。先行研究ではお見合い結婚等の衰退によるきっかけの減少，女性の社会進出や経済的な理由，結婚への圧力が減退した社会的風潮などが原因に挙げられており，官民問わず結婚支援事業は盛んではあるが，依然として未婚化に歯止めはかかっていない。

本研究では人口動態統計（2018）による平均初婚年齢を過ぎた未婚者が，結婚の意思を持ちながら未婚に留まっている状況を明らかにする一助として，未婚者が結婚に対して抱くイメージについて調査した。現在未婚であるプロセスや心理的傾向を捉えるため13名の未婚者にインタビューを行った結果，様々な事情や経験，心情を抱え，複雑に行きつ戻りつする結婚への意思と躊躇があることが見えた。そして，自身の養育歴，周囲からの圧力，孤独，子どもやパートナーへの期待と危惧など様々な逡巡の結果，自身の人生の経験値が促進要因となり，その他の阻害要因を上回った際に，結婚という決断を下すことができると分かった。

キーワード：少子化　未婚・晩婚　未婚者の結婚イメージ　結婚活動　結婚の意思

Ⅰ．問題と背景・目的

1．問題と背景

日本政府は2004年版少子化社会白書において「合計特殊出生率が人口置き換え水準をはるかに下回り，かつ，子供の数が高齢者人口（65歳以上人口）よりも少なくなった社会」を「少

＊臨床心理学研究科 博士課程（前期）

子社会」と定義している。日本は現在も依然として深刻な少子高齢化に直面しており，その原因の一つに晩婚化や未婚率の増加が挙げられている。国勢調査（2015）によると，生涯未婚率は男性23.37％，女性14.06％と，過去最高を更新した。結婚する意思をもつ未婚者は9割弱で推移しているが，その中で結婚をしない主な理由として挙げられているのが「適当な相手にまだめぐり会わない」である。結婚までの平均交際期間が4.3年と伸長が続いている現代で，現実的に数年以内の結婚を望むのであれば，まずは交際相手を見つけることが急がれる中においても，「まだ」，「結婚したくないのではなく，していない」という未婚者の感覚からは焦りやスピード感は感じられない。なお，恋人のいない未婚者は男性7割，女性6割（第15回出生動向基本調査，2015）。1980年時点での未婚率は30代後半の男性8.5％，女性5.5％であったが，2015年には，男性は35.0％とおよそ3人に1人，女性は23.9％とおよそ4人に1人が未婚という現状である。

「婚活」の普及とともに，結婚支援サービスは民間業者のみならず公的な事業としても広がりを見せている（大瀧，2016）。多くの自治体において結婚支援事業が実施されており，2010年に内閣府が行った調査によると，事業を実施している自治体は47都道府県のうち，31（66％）にのぼる。このように，官民問わず少子化対策事業に乗り出しているものの，実際は晩婚・非婚化に歯止めがかかっているとはいいがたい。

また，現代の結婚への導入は戦前より大きく様変わりした。戦前約7割を占めたお見合い結婚は，1960年代末には恋愛結婚と比率が逆転，1990年代半ばに1割を切り，2010 ～ 2014年には5.5％に留まる。お見合いが旧弊化した現代において，結婚への導入は男女交際の延長にある私的なものとなった。

NHKによる家族に関する世論調査（2010）によれば，「人は結婚するのが当たり前だ」と考える人は27％，「必ずしも結婚する必要はない」という人が73％であった。性年層別では，男性30代以下と女性50代以下では「必要はない」，男女の60代以上で「当たり前だ」という人が全体よりも高く，年層によっても違いがみられた。未婚者に限定すると，「必要はない」は，男性84％，女性では93％に上っている。そして「結婚する，しないは個人の自由である」に対し「そう思う」という人が90％を占め，「愛情に基づくべきものである」が84％。結婚は，必ずしも「する必要」はない，自由意志と愛情に基づくものとなった。山田（2010）は，職場結婚や見合い斡旋があった1980年代までの日本に比べ，現代は待っているだけでは何もせずに結婚にふさわしい相手と巡り会う可能性が低下しており，結婚に向けて自分で積極的に活動をし，主体的に人生をプロデュースしなければならない現代を，近代社会の深化にともなう「自己決定の要請」の拡大の結婚版であるとした。三輪（2010）は，現代の日本は，古典的な「人生ゲーム」のような，誰にでも結婚というライフイベントが起こるという状態では既になく，もはや結婚することが当たり前とはいえなくなりつつある時代状況であるからこそ，未婚者が結婚や交際について何を考え，何をしているのかを研究することが必要になってきていると述べている。

このように結婚に対する意識や決定までの背景には変化が見られる一方，他人同士が繋がり共同体となる結婚において，深い次元での意思疎通，価値観や方向性の共有が求められること。また，個人が双方の親族とも関わりを持ち，家族というチームを作る社会的行動という側面を併せ持つことに変わりはない。自由に「する・しない」や，パートナーを選定できることは自己責任かつ重大な決断であり，要する覚悟は相当なものと考えられる。

国立青少年教育振興機構の20 ～ 30代に向けた若者の結婚観・子育て観等に関する調査（2016）によれば，「結婚したい」「子どもは欲しい」という意識は，自身の幼少期においての「人間的なふれあい（友だちとの遊び，地域活動，家族行事など）」を通じた活動が関わって

いることが分かった。また，中高生のときに異性とのコミュニケーションを面倒だと感じた者は，現在結婚願望が低い傾向が見られ，結婚していない代表的な理由は「経済的に難しい」ことと，「一人が楽であること」となっている。そして，地域とのつながりについての行動や考え方が前向きなほど（例えば「近所の人とあいさつをする」，「地域とのつながりが他人のためにもなり自分の成長にもつながる」，「これからの良い社会を創るために必要である」など），「結婚したい」「子どもは欲しい」という意識が高い傾向があることを示す。養育歴，経済力，社交性や，対人コミュニケーションに対する意欲と結婚への意欲との関連性がうかがえる。

加えて，恋愛結婚に向けた，パートナーと出会い，交際に至るまでの難しさがある。出生動向基本調査のデータを用いて過去30年間の初婚率の低下量を要因分解した岩澤（2005）によれば，低下分の約半数は「お見合い結婚」の減少，残りのほとんどは「職場や仕事の関係で」，つまり「職縁結婚」の減少によって説明できるとし，言い換えれば「学校」，「友人・きょうだいを通じて」，「街中や旅行で」等の出会いによる結婚の発生確率は，40年間ほぼ変わっておらず，恋愛結婚が隆盛を誇った企業社会によるマッチングシステムの弱体化によって，その分だけ結婚が減少したとした。中村･佐藤（2010）は，現代の「恋人との出会い」に与える可能性について分析し，「経済的要因の影響」としては男女双方の若者に正規就業の機会が増えれば，若者の出会いの機会が増加し，ひいては婚姻率が上昇するという可能性を示した。そして「距離的なアクセス機会（職場内外の異性との接触機会）の影響」では男性にのみ，職場内で出会う異性の数と恋人がいる傾向に影響が見られた。「時間的なアクセス機会（残業と休日勤務）の影響」では，長時間労働は未婚化の原因になっていると議論されることが多いものの，男性は勤務時間の短縮が必ずしも恋愛の増加にはつながらない可能性を示した。一方で女性の場合，休日出勤をしている者に恋人がいない傾向が高いことが分かった。「対人関係能力の影響」では，月に1～2回程度友人と付き合う対人関係能力を持つことが男性にとって恋人を作る上で必要だということを述べ，恋愛のためには男性側の対人関係能力の向上と，女性側からのアプローチの有効性を示唆している。しかし，この調査では当人が何をきっかけに恋人や結婚の必要性を覚え，何らかのアクションをするのかといった点には触れられていない。また，晩婚化には経済的な理由，つまり若年層の経済的脆弱さを主たる要因として挙げている研究は多く見られ，特に男性の非正規雇用者の増加による，低所得化の影響についてはさまざまな調査で明らかにされている。結婚の意思という点においては，内閣府経済社会総合研究所の少子化と未婚女性の生活環境に関する分析（2015）によると，経済的基盤だけではなく，そもそも正規雇用者に比べ非正規雇用者の方が結婚意欲は低く，その要因の一部は，交際相手がいることが少ないことであるとした。そして，周囲に正規雇用者の割合も低いことから，職場独身異性ネットワークの特徴が非正規雇用者の結婚意欲を低くしていることが明らかになったとしている。山田（2000）によれば，未婚女性は自分の父親と同等以上の生涯経済力をもつと思われる適齢期男性の減少によって，未婚男性は結婚後の生活水準に対する責任を感じるが故に晩婚化が進むとしている。

結婚活動経験率の促進・抑制に関わる結婚価値と経済的要因について検討した永久・寺島（2015）は，経済的に安定した層の男性においても晩婚化・未婚化の進行は著しいこと，女性の晩婚化・未婚化は女性の社会進出や性別分業による家庭役割の負担などにその要因を求められることが多いものの，未婚理由1位の「適当な相手にめぐりあわない」に比べ，「仕事ができなくなる」は格段に低い（三輪，2010）ことから，経済的要因だけで晩婚化・未婚化が説明できず，「適当な相手にめぐりあわない」のはなぜか，という経済理由以外の要因についての研究の必要性と，先行研究における結婚活動へ

の心理学的アプローチが見られていないことに触れた。そして，年収は男性にとっては結婚活動経験率とは直接的に関連しておらず，女性にとっては関連が見られるが，年収が低い群と高い群の両極において経験率が低いことを示唆した。そして，結婚活動経験率は，個人の友人ネットワークの質や大きさ，あるいはそのネットワークを維持する時間的資源などにより左右されるものと考えられるとしている。中村・佐藤（2010）は，恋人とめぐりあわない理由を解明する調査で，傾向はあるものの一義的でなく様々な理由があることを示唆している。三輪（2010）による結婚活動の効果分析では，約4割が活動をしたことが確認され，しない場合と比較した場合は概ね成果が得られやすいようであったものの，個人特性などを調整した後には，ほとんど効果が確認されなかった。西村（2014）の調査では男女計で恋人がいる未婚者は4人に1人。恋人がいない人の約半数が恋人が欲しいと回答した一方，その内半数強は恋人と出会うために何の活動もしていない。「適当な相手にめぐり会わない」は単なるミスマッチの問題ではないことが明らかだと述べた。そして恋人を作らない未婚者の全体像を整理した結果，相手を見つけるためのコミュニケーション能力を高める必要や，昨今の結婚適齢期に対する社会的規範の弱まりと個人のライフスタイルの多様化に触れ，結婚の問題に先送りの自覚と自制心が求められる時代になったとしている。

未婚者の結婚意欲と出生意欲には高い同時性がある（内閣府, 2015）。岩澤（2002）によれば，1975年以降の出生率低下のおよそ7割は未婚化によって説明できるとされている。大瀧（2016）によれば，日本では，結婚外での出産が社会的あるいは制度的に強く抑制されており，国際的に見ても婚外出産率が低く，未婚率の上昇は少子化を進めている大きな要因となるとした。

大和（2015）は調査で独身者に結婚の利点や結婚相手に求める条件などを聞き，未婚化の要因を「自発的未婚」説と「非自発的未婚」説の2つの仮説を立て，データを検証した結果，「自発的未婚」説だけで未婚化・晩婚化をすべて説明できるとは言えず，むしろ「非自発的未婚」説で未婚化・晩婚化を説明できる部分が多いとした。そして，「非自発的未婚」説においては，お見合いや職縁結婚の衰退といわれる「共同体による配偶者選択支援の弱化」説と，「若者の雇用不安定化」説の2つに分けられ，その両方が男女それぞれに直接的または間接的に未婚化に影響している要因であると述べた。

これらの先行研究からも，未婚者の多くは結婚への意思がないわけではなく，未婚の理由を「自分の結婚相手としてふさわしい候補者が現れない」結果と捉えている者が多い傾向があると言える。また，経済的な問題や環境因も理由としては作用しているものの，これらが主なる要因となり結婚が阻まれているというだけでは，未婚化・非婚化の説明として十分とは言えないことが分かる。すなわち，ただその未婚者の言葉の通り，「いい人」との巡り会いを増やすべく，単純にパートナーと出会う場の増加や，経済的サポート受けられた場合においても，未婚化・非婚化に対して効果が十分に得られるのかという点では疑問が残る。

2. 目的

これまで少子化の進行や未婚率の上昇を受けて，どのような人々が結婚している（していない）のか，またどのような人々の結婚意欲が強い（弱い）のかが分析されてきた（大瀧, 2016）が，わが国での先行研究では，結婚に対する意思を問うものが多く，その背景についての臨床心理学領域での研究は多くはない。両親との関係性が結婚観や結婚意欲を左右することは，大学生・大学院生を対象とした研究で行われているが（伊藤・新井，2015，改発・向後，2018など），人口動態統計（2018）による平均初婚年齢（夫31.1歳，妻29.4歳）を過ぎた未婚者が，特別な経済的理由も無く，現在結婚をすることが阻まれていない状況において，結婚の意志があるにも関わらず未婚に留まっている要因を心理的な側面から明らかにするような調査

研究が必要であると考えられる。

そこで本研究では，わが国において進行している未婚化・非婚化に関して，平均初婚年齢を過ぎた未婚者が結婚に対して持っているイメージについて調査し，現在未婚であるプロセスや心理的傾向を探索的に捉えることを目的とする。

Ⅱ．方　法

1．調査協力者

結婚の意思がある結婚経験，子どものない未婚者30代から50代（平均年齢38.8歳）の男女13名に協力してもらった。本研究では性差は考慮していないが，性別の内訳は男性7名（平均年齢39.7歳），女性6名（平均年齢37.8歳）であった。調査対象者は，知人・友人などの縁故法で募った。

2．調査方法

本調査は，半構造化面接による調査である。調査場所はプライバシーの保たれる個室（貸会議室等）を用いた。面接前に調査依頼文を読み合わせ，説明を行った。調査依頼文には，研究の意義・目的，個人情報保護の方法，研究協力辞退の自由，協力は自由意志に基づくものであり，辞退による不利益は一切被らないこと，中断できること，答えたくない質問には答える必要がないこと，インタビュー内容は個人が特定されない形で研究発表を行う旨を記した。また，了承の上インタビュー内容はICレコーダーに記録し，厳重に管理を行う旨を伝え，同意書に署名を求め面接を実施した。なお，面接調査終了時に謝礼として2,000円分のギフトカードを渡した。

3．調査期間

調査期間は2019年8月～2019年10月，調査の所要時間は一人あたりおよそ30分～1時間程度を要した。

4．調査内容

年齢，性別，職業，婚暦の有無，結婚への意思について質問を行ったのち，半構造化面接を行う。結婚観尺度［竹原・三砂（2006）］を参照し独自にインタビューガイドを作成した。以下5項目について自由に語ってもらうことし，必要に応じて内容を深めるための具体的な質問をした。

①結婚についての興味や関心はありますか？
②結婚に対してどのような（良い／悪い）イメージがありますか？
③ご自身の結婚生活はどのようなものになると思うか教えてください。
④今すぐ結婚することになった場合，どう思いますか？
⑤子どもについてどう思いますか？

5．分析方法

本研究ではインタビューデータを木下（2003）の修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いて分析を行う。質的研究としての分析方法が明確であること，対象領域が社会的問題となっている未婚・晩婚問題であり，未婚者へ直接面接をするという実践的な調査であること，さらに未婚に至る心理プロセスを検討するという内容から本分析方法を採用した。

具体的には，インタビューデータを逐語化し，データを読み込む。それを元に複数の概念を抽出し，各概念との関係を検討，類似する複数の概念からそれを包含するカテゴリーを生成する。生成したカテゴリーと概念の相互関係を検討し，それを結果図（分析結果の全体を表す図）として作成し，併せて解釈的に文章にまとめ分析結果とした。

Ⅲ．結　果

1．結果図

語られた内容をM-GTAを用いて分析した結

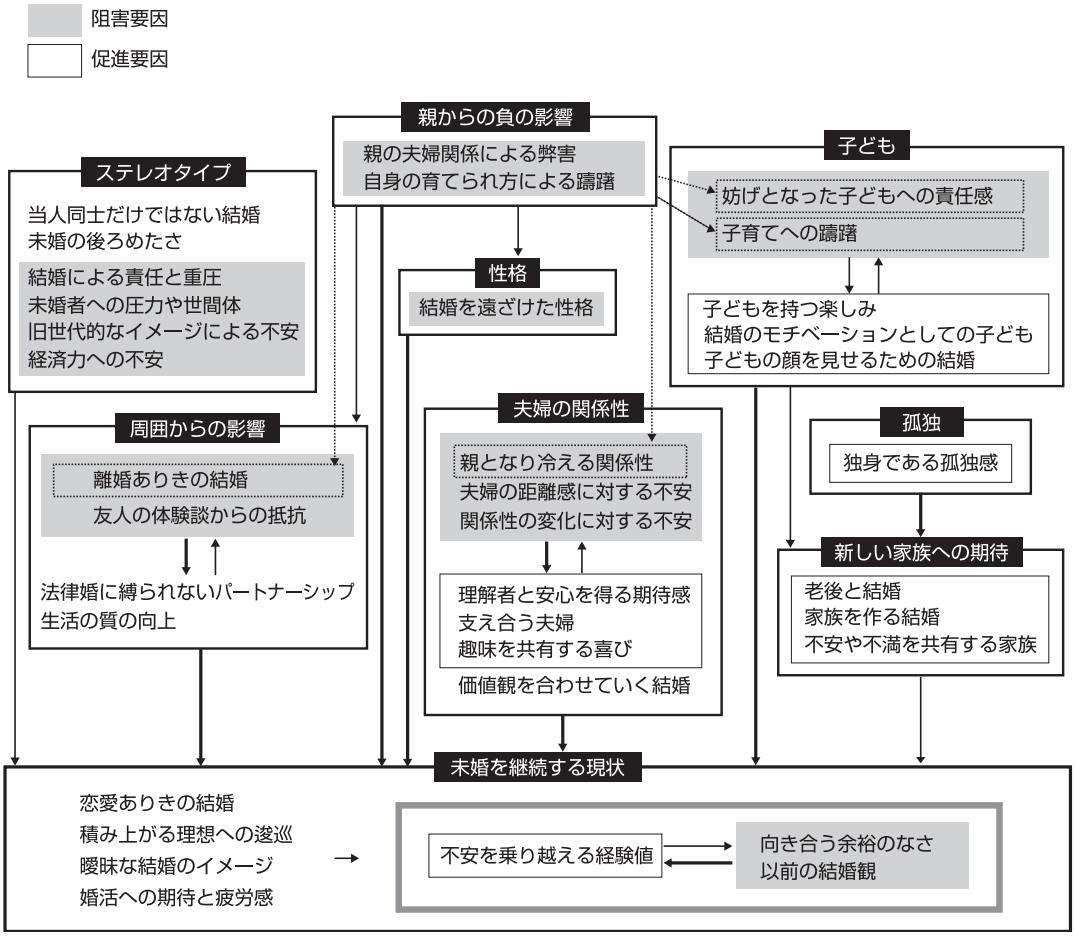

図1　結果図

果，36の概念から，9つのカテゴリーが生成された。これらのカテゴリーと概念から導かれたものを結果図に示した。なお，結果図では矢印の点線は間接的，実線は直接的な干渉を表し，線の強弱はその度合いを示す。本文ではカテゴリーは〈　〉，概念は【　】で表す。

2. 分析結果

未婚を継続している者には，自身の原家族からの影響が色濃く見受けられ，両親の不在，離婚や不倫，不仲，相互協力の乏しさなどから，安定した夫婦関係や結婚生活を思い描くことが困難になる【親の夫婦関係による弊害】，自身の養育環境への不全感，同胞きょうだい間での不公平感などの養育態度への反感や違和感により，自分が子育てをした場合における懸念を抱く【自身の育てられ方による躊躇】などの〈親からの負の影響〉が見られる。

そして現実的に結婚を考えた際に，自分の〈性格〉を考慮した結果，自分は結婚に向いていないのかもしれないと危惧する【結婚を遠ざけた性格】があり，これもまた，原家族からの影響は看過できない。

また，〈子ども〉を持ち養育する責任を重く受け止め，結婚を決心する妨げとなっている【妨げとなった子どもへの責任感】に加え，子どもが好きという漠然とした気持ちはあるものの，実際に今の年齢で自身が授かることができ

るのか，きちんとした養育を施せるのかという不安を抱えた【子育てへの躊躇】もあり，これらも自身の養育環境による負の影響について関連性が認められる。一方で，子どもを持つことには結婚への意欲を促進する要因となる側面もあり，子どもを持ったら一緒にやりたいこと等を思い描き，子育ての苦労であれば乗り越えることができるという手応えを感じ，子育て全般への前向きな期待感である【子どもを持つ楽しみ】も抱いている。なお，【子育てへの躊躇】は女性からの発言が中心であった一方で，【子どもを持つ楽しみ】は男性からの発言が中心であった。加えて，子どもを望むかどうかが，結婚へのモチベーションや，結婚時期を左右している【結婚のモチベーションとしての子ども】や，親などに自身の子どもの顔を見せたいという気持ちが結婚の動機のひとつになる【子どもの顔を見せるための結婚】などは，結婚への前向きな意思に繋がると考えられる。

未婚者は【独身である孤独感】を抱え，例えば一人で誰もいない家に帰る〈孤独〉よりは，誰かの待つ家にただいまと声をかけ帰宅したり，誰かをお帰りと迎えられるような家族がいるのも悪くないという気持ちも覗かせる。結婚を〈新しい家族への期待〉とし，自身の老後等を意識した際，改めて誰かと暮らしたいと思い直す【老後と結婚】，結婚はパートナーと「家族」であると周囲に認められ，「家庭を持つ」ということである【家族を作る結婚】，ネガティブな状況に置かれたとしても，いかにそれを家族で共有するかが重要なのではないかという【不安や不満を共有する家族】にも思いを馳せている。

夫婦間のパートナーシップに目を向けた〈夫婦の関係性〉では，気遣ったり折り合いをつけながらも，意見を一方的に押しつけるようなことなく，お互いを尊重しながらも価値観を共有できるのかが大切だと考える【価値観を合わせて行く結婚】や，パートナーができることで，新しい趣味の発見や興味が膨らんだり，自身の趣味を共有する楽しみがあるのではと期待する【趣味を共有する喜び】に前向きな感情を持つ一方，母となり夫の不満ばかりを口にする（子どもを持つ既婚の）友人の話等を聞き，夫婦間の関係の変化を懸念している【親となり冷える関係性】，夫婦がお互いを束縛せず，納得できる適度な距離感を保つのは難しいのではないかという【夫婦の距離感に対する不安】，初めは好き同士で結婚したとしても，その気持ちは永続的ではないのではないかという【関係性の変化に対する不安】は結婚を躊躇させる要因となり，未婚者の感情はその中で忙しく揺れ動いている。

〈ステレオタイプ〉な結婚のイメージは，自身の結婚への意思に表面的な影響を与えている。結婚は選ばれることであり，未婚であることで自身に何らかの欠陥があるのではないかと負い目を抱く【未婚である後ろめたさ】や，結婚は当人同士だけの問題ではなく，自分の家族や相手の家族のことをも包括的に考え，後ろ向きな感情を募らせてしまう【当人同士だけではない結婚】があるが，これらは悩ましい要因であると同時に，結婚への促進要因にもなりうる側面をも併せ持つ。

結婚によって今よりも社会的責任が増し，周囲からの圧力が生じることを仮定し懸念する【結婚による責任と重圧】，未婚であることで周囲からの反応や世間体についての実感して辟易している【未婚者への圧力や世間体】，男性は稼ぎ手となり，女は家で家事や子育てを中心に担うべきという旧世代的な考えが，結婚に不安を抱かせている【旧世代的なイメージによる不安】，社会情勢的に景気の好転が望めず，自身の経済力に対しての不安を覚える【経済力への不安】などは結婚への阻害要因として未婚者に重くのし掛かっている。なお，【経済力への不安】は特に男性からの意識が強い。

〈周囲からの影響〉により，結婚を考える際，離婚ありきの捉え方となり，結果ハードルをあげている【離婚ありきの結婚】，これは前述の親の不仲等から，安定した夫婦での暮らしを見いだすことが出来ない影響が見受けられる。加えて結婚した友人等に離婚や不仲が多く見聞き

され，自身も結婚に前向きになれない【友人の体験談からの抵抗】などが作用した結果，従来の法律婚に煩わしさを覚え，お互いの人生がより良くなるのであれば，入籍にこだわることはないのではないかという【法律婚に縛られないパートナーシップ】も検討材料となっている。また，周囲からの情報を見聞きしたことで，家事等の負担は増えることがあったとしても，一人で暮らすよりも全体的な【生活の質の向上】が望めるのではないかというイメージも抱いている。

それらが相互に作用した〈未婚を選択する現状〉は，結婚という制度自体に乗ずる感覚へ違和感を覚え，まずは恋愛から始めるものなのではという【恋愛ありきの結婚】を思い描くものの，結婚に対して何らかのイメージはありつつ具体性には欠け現実感がない【曖昧な結婚のイメージ】を持つ。今までの恋愛や社会での経験が積み重なるにつれ，相手への理想の条件も積み上がり，決めかねている【積み上がる理想への逡巡】をしながら，友人や知人からの紹介や合コン，マッチングアプリ，婚活パーティなどの婚活を出会いのきっかけとして期待しているものの，実際に活動をすることへは疲労感が高く，積極的になれない【婚活への期待と疲労感】を抱く。結果，以前は「いつか結婚するのだろう」とぼんやり考えていたものの，実際に年齢を重ねその「いつか」の年代になっても，結婚のビジョンを明確にできないまま【以前の結婚観】を振り返る。そこには，結婚を考えないわけではないが，仕事や日々の生活に追われ，今は真剣にその問題に向き合える余裕がないと感じる【向き合う余裕のなさ】が横たわる一方で，独身生活を経て，ある程度経験を積み自己を知った上であれば「やってみないと分からない」「まずはやってみよう」と結婚を前向きに考えられる【不安を乗り越える経験値】が対立し，結婚をしたくない訳ではないが，現状は未婚であるという状態が生み出されている。

Ⅳ．考　察

本研究では，積極的に結婚を拒否している訳ではない未婚者へのインタビューから，現在未婚である状態についてM-GTAを用いて分析，検討した。

1．養育環境による影

まず自身の複雑な家庭環境について，多くの語りが見られた点に注目したい。未婚である現状は〈親からの負の影響〉として，養育環境から強い影響を受けていると考えられる。【親の夫婦関係による弊害】では，「父も一応仕事……自営だったんだけど，母はそれを手伝わないんだよね。自分は自分の好きなことしてて。なんかまとまらない家だったのね。だから両親からはあまり結婚とか……イメージ無いね。夫婦とか。」(A)，「離婚とか。結婚があれば離婚だってあるわけで。うちの親が親だから。家庭環境もあるよね。離婚したりとかもあったし。安定した結婚生活って思い描きにくいよね。(夫婦は) 所詮他人なので。」(B) といった，「結婚したい」と思えるようなモデルとなる夫婦像を見ずに育った様子が見受けられた。そこには，未知なものである「幸せな結婚生活」を自身にとっての現実として身近に思い描きにくく，結婚に対しての抵抗感や不信感を覚えやすい現状がうかがえる。【自身の育てられ方による躊躇】でも，「私は一番上なので……やっぱり制約されてたりもするのね。だからもし自分が産んだら……多分同じようなことをしちゃうんじゃ無いかなって怖くなったこともあるの。実際。だから逆に今産んで無くて……まあ結婚もしてないけど，そこも正直……あったのかな……って思ったりはする。……あった。うん。別にそれはすごく母親が，愛情を注いでないとかじゃないんだけど。」(A)，「それは母親から言われてきたからさ。あんた泣くのはいいけど，人生嫌なことばっかりなんだから。そのうち良いことが一個や二個あるくらいもので，そ

れを探しながら生きるんだっていう。（中略）死んじゃっても良いけどって，そうすれば苦しいことも無いんだよって言われたのが，根底にはあるよね。やっぱ。トラウマではないんだけど……（中略）人生辛いことがほとんどだからさ。仕事してたって嫌なことばっかだしさ。（中略）親になるってそういう重大なことだから。」（K），「でも子どもいると（自分がされたように突然）お父さん違う人になるよって言われる子どもの立場になると……子どもできたら離婚しないかなって自分の中では思う。それがよほどの人を見つけなきゃって重荷にはなってるけど，なかなかパーフェクトな，そんな人いないですからね。」（L）といった，幼少時の体験からの結婚や子育てへのネガティブな影響が目立った。森・桂田（2017），斎藤（2014）や，山内・伊藤（2008）らの先行研究にある通り，両親の夫婦関係は青年期の結婚願望や結婚観に影響を与えうることは述べられてきたが，人口動態統計（2018）による平均初婚年齢（夫31.1歳，妻29.4歳）を過ぎ，30代を迎え実際に結婚を現実のものとして考える年齢を迎えた本研究の対象者においても，未だ結婚の問題と現実的に直面することを避けている現状が見受けられた。

また，自身の〈性格〉では，自身の幼少期を併せて語る様子が多く見られることから，〈親からの負の影響〉が少なからず見られる。結婚に対して特に慎重になりすぎているという自覚があり，結婚という重大な決定を自分にはできないのではと不安に感じ，思ったことをそのまま言えず無理をして溜め込んでしまうような【結婚を遠ざけた性格】を持つ自分には，結婚は向いていないのではと危惧している。しかし，結婚自体を否定する発言は見られなかったことからも，自分なりの幸せを掴もうと模索している様子もあり，阻害要因としての自身の養育環境による負のイメージを何らかの形で払拭することができれば，結婚の意思が促進される可能性が示唆される。

2. 家庭を築くための結婚

田間（2015）は，1970年代初頭までは，我が国の生殖は法律婚姻の中で生じるように見事に統制されていたこと，しかし1970年代後半から性関係や生殖の統制，社会状況は変化し未婚化・晩婚化が進んだと述べている。加えて，国際的潮流に則り，非嫡出子を差別しない人権保障が進められているものの，依然として日本では子どもをもつことが夫婦そろった家族によって実現されるべきであるという規範意識があり，妊娠先行型結婚があるように子どもは結婚を促進する要因である一方で，この規範意識こそが少子化を促進する逆説的可能性について指摘している。

未婚者のインタビューである本研究でも，結婚と〈子ども〉を密接に繋げる発言が見られたものの，子どもを持つことに対する責任感を強く感じさせる発言が目立つ。「（結婚自体は相手に）流されてする分には，しちゃうかなー……。ただ，流されて子どもはいらない。……それは，責任を負うからだと思う。（中略）子ども＝責任って感じ。それを自分じゃ持ちきれないから。そこは流されない。」（F）といったように「子ども＝責任」と称し，その重圧の重さが語られ，「自分が育った環境とか……例えば母親……が，私に対してちょっとその……何て言うんだろう。育て方，とか。見てて。なんか嫌だなーってところもあるわけですよ」（A）というように，子育てに関して親に対し複雑な思いを抱えているケース等が見られた。このような結婚の【妨げとなった子どもへの責任感】にも，〈親からの負の影響〉が見て取れる。

大橋（2000）は，女性が経済的に自立できず，永久就職として結婚を選ぶ以外ない時代，男性が企業戦士として高度経済成長期に働くために，出産，育児，家事，介護といった再生産労働を一切無償で引き受ける専業主婦を必要とされていたが，高学歴化し，労働力として高い付加価値を身につけた現代の女性にとって，もはや結婚の経済的，社会的メリットは，極めて乏しいものになっていると述べている。確かに時

代は変化しているものの，それでも依然として女性には産む性としての役割は残っている。日本産婦人科学会が定義する「高齢出産」は35歳以上，女性の平均初婚年齢が30歳に迫っている現在，不妊治療もけして珍しいものではなくなっている。未婚女性は【子育てへの躊躇】を感じ，結婚後子を授かり，育てることができるのかという不安を抱えている。「今から子どもが欲しいっていう……年齢的に，そこを今から望むならそこ，結構外せない，なんていうか，（外せない）ものとして考えるならそれを中心に生活を回さなきゃいけない……っていうか，そこまでして（子どもが）欲しいのかって言ったら，ビミョーとも思うし，でもいらないですとか言い切れない感じ」（E）といったように，「子どもが欲しい」と願うのであれば今すぐ結婚の問題と直面しなければならない現実と，「子どもはいらない」とも言い切れないという複雑な心情がある。そして，女性には男性に比べ生殖可能年齢が低いがゆえの，実子を持つ「タイムリミット」を意識するバリエーションや，「ワンオペ育児」などの子育てに対する不安が見られることが特徴として挙げられる。

一方で【結婚のモチベーションとしての子ども】においては，子どもの問題は結婚への促進要因としても示される。「（子どもについては結婚の）モチベーション占めてますね。これが多分，50くらいまで産めるって事なら，こんなに（婚活を）頑張らなかったと思う」（C）というように，子ども（実子）が欲しければ，自身の年齢を考えた際まず結婚をしなくてはという焦燥感が認められる。また，【子どもの顔を見せるための結婚】では，周囲から，例えば両親からの「孫の顔が見たい」という圧力，また実際に具体的な圧力がなかったとしても，周囲の期待に応え子どもを育み安心させたい，喜ばせたいという思いはあり，これが結婚への動機のひとつとなる可能性もある。そして，【子どもを持つ楽しみ】として，子どもが生まれたらこんな風に育てたい，色々な経験を一緒にしたいという期待を持っており，「周り子ども出来た人いっぱいいるから，その人達の話を聞くとまあ大変なりにも楽しんでるよね。子育てを。その，夜泣きが大変だから夜中起きるとか。聞いてるけど，でもそれって仕事とかで夜寝てないんですよねってしゃべり方と明らかに違うからね。そういう状況も全然，苦にも思ってないだろうし，実際自分も子どもを持ったら苦にならないんだろうし」（H），「一緒にこう，生活をしていく中での一つの糧にはなるかなって。なんか子どもがいたら，子どもに良い格好しなきゃねとか，もう少し働かないととか，どっか遊びに連れて行きたいねとか，そういうの思うのってそんなに嫌じゃなくて」（G）といった発言からも，困難を前向きに乗り越えようとする意思が見られる。そして，これらは男性から述べられるケースが多いことも特徴的である。

〈子ども〉に対する思いは，〈新しい家族への期待〉に繋がっていく。また，【独身である孤独感】に見られる〈孤独〉は，「うーん，なんかやっぱ帰って来て家が暗いとちょっと寂しいし，誰か帰って来てくれたら嬉しいしって。なんだろ，ほっとできる時間が欲しいなっていう。（中略）なんか，なんとなく（ひとりは）不安になるんだよね。あの……楽しいことあるけれど，多いけれど，まあじゃあ，ずっとこれが続くのかって思うとなんとなくちょっとだけむなしくなるっていうか。だから将来どうするのかなあっていうのは，うん，思ってはいたね。」（G）といったような，単身生活を経験した上で未婚である孤独感が語られ，誰かと「ただいま」と「お帰り」を言えるような環境に対し，期待が表われている。〈新しい家族への期待〉は結婚への促進要因として作用しており，【老後と結婚】では，結婚した場合としなかった場合の自身のライフプランが比較され，「（結婚は）重要な問題ではあった。年を食ったらどうしようって不安はやっぱりあって。えっと……そうは言っても結婚……相手がいないと出来ない話で。当たり前だけど。だから，えっとー……結婚したとき……出来るときと，出来なかった時の準備はしておかなきゃっていう

……」（G）といった，老後の不安を救済するものとして結婚が例示されている。すなわち，結婚に「孤独死」や「介護」などに対する互助システムとしての役割を見出していることが分かる。結婚とは家族を作ることという【家族を作る結婚】では，家族や同居人の存在が肯定的な存在として語られ，安心感や充足感についての情緒的な認識が見受けられる。パートナーと「家族である」と世間的に，また合法的に認められるには結婚が不可欠であるという認識や，子どもが生まれ家族が増えることに対しても前向きな意見が見られた。

また，現在独身であることに否定的ではないものの，「結婚して家族っていうものを作るって言うのは……なんか，そっちのほうが自然なんだろうなって思います。なんか，生命として……。だから今，自然に反してるかなって感じるって言うか」（E）といった，未婚でいる現状を「家族を作っていない」，「自然に反しているのではないか」とも感じている側面も語られた。

3. パートナーシップとしての結婚

家族については概ね前向きな要因となった一方で，家族の最小単位であるパートナー，〈夫婦の関係性〉については大きなジレンマがあり，不安と期待が入り混じった結果となっている。また，ここにも間接的に自身の親の離婚体験等の養育環境からの影響も見られる。【親となり冷える関係性】では，マタニティ・ブルースや，産後クライシス，子育ての困難さに対し一定の理解を示しながらも，「やっぱり母親になっちゃってるのかなって。子どもは別に……でも旦那さんいなきゃ子ども生まれないでしょうって。結婚しなきゃ良かった，とか言うけどさ，子ども……生まれてるじゃん，とか。」（A）といった，妻が子を産み母となった際，夫との関係性にネガティブな変化が訪れることに対する疑問と不安が見受けられた。そこに，理不尽さへの憤りのニュアンスが含まれているように感じられるのは，自身の養育環境からの影響が反映された影響であろうか。加えて，【夫婦の距離感に対する不安】も未婚者にとって無視することのできない要素である。「うーんそういう……結婚しても……うーん……まあ相手に合わせなきゃとか，そういうのが出てくるから……そういうのは一旦やっぱり切りたいんですよ。仕事から帰ってきたら。仕事で繋がってるけど，お疲れ様ってなるじゃないですか。で，一人の時間が嬉しいんですよね。で，結局仕事が終わって，帰ったらまたいる，みたいな。それでまた気を遣うみたいな。いくら好きだっていっても完全に気兼ねなくって……なれないと思うんですよね。」（D），「やっぱ……生活していくのが，大変かなって。うーん……なんでしょう，二人で暮らしてた事ってないので……なかったから，じゃあ結婚して金銭面とかでやっていけるのかなとかは心配で。あと趣味のこととかもやっていきたいから，そこはある程度制限が出てきたりとかもするから。趣味でやりたいことと，結婚生活と，上手いこと両立するんだろうかっていう。だから，趣味の制限と，経済的な不安って感じかな……」（G），「結構こう，心の疲れを一人の時間で癒やすタイプなんですよ。疲れちゃうんですよ。うん。なので，そういうのを一人の時間に好きなことをするとか，うーん，そうですね……ストレス発散できるようなことをするとか。ストレス発散は友達ともするんですけど。そういう時間が減ってしまうのは怖いかも知れない。」（M）といったような，孤独を抱える一方で，趣味に興じたり，誰にも気兼ねすることなくゆっくりと過ごすような一人の時間をかけがえのないものと重要視し，それを日常の励みや癒やしの場としている未婚者にとって，趣味等が制限され，自分の時間が束縛されることは結婚の前提であると捉え，それに伴う未知のストレスについて頭を悩ませる。つまり，理想としては夫婦でお互いが束縛をせず，納得する適度な距離感を保つことであるものの，それは現実的に難しいのではないかという不安が高く，中には「前の会社の同僚（中略）その夫婦の形は……子どもはいないんだけど，ある意味理想だなって。家も

別だし。平日は自分の時間。週末は夫婦の時間。アレが上手くいくのかなって。毎日顔合わせるわけじゃないし，なんか理想的だなって。付かず離れず。距離感っていうか。」(B)，「まーその，世の中でも籍は入れてても別々に暮らしてます，みたいなのもありますからね。」(D) といった，暮らしを共にしない「別居婚」等の婚姻スタイルへの憧れも覗かせる。【関係性の変化に対する不安】では，更に配偶者への愛情や気持ちの揺れについて詳しく掘り下げられており，「一般的に悪いイメージって考えると，男の人はやっぱり不倫してたりとか，不倫願望，みたいなのを持ってる人が多いし。実際自分も……不倫したことはないけど，不倫のお誘い，みたいなものは何度も受けたことはあるし，実際周りでも……愛妻家，みたいなキャラの人でも隙あらばと思っていたりとかもする，から，だからなんだろう，あと実際ラブラブだったけど離婚した友達がいたりとか，そういうのを見てたりするから，（結婚って）割と刹那的なのかなって。結婚においての愛情って脆弱だなって」(E) といった結婚後の双方の愛情の持続について猜疑的な様子がうかがえる。これは，恋愛に基づく結婚が主流となった現代ならではの，浮き彫りとなった現状であろう。

一方で【理解者と安心を得る期待感】では，結婚により「理解し合える」，「語り合える」唯一無二のパートナーを得ること，安らぎや安心感についての期待をにじませる。内容としては，漠然とした憧れを語るものから，「あの例えば風邪引いて寝込んだとか，ひとりでいると相当辛いんですよ。そういうときに助けてくれる人がいたらいいなっていう。それが身体の方ですよね。で，気持ち的には，会社ですごい辛いことがあって，家に帰ったときに今日こんなことがあったんだけどって話を聞いてくれる奥さんがいれば，気持ちもその，落ち着くのかなって思ったりします。なんか夢見てるのかもしれないですけど。」(M) といった現実的な内容も見られる。更に【支え合う夫婦】では，配偶者の「やりたいこと」に対する経済的支援について語られ，金銭を伴う支援を行うことは夫婦だからこそできる決断であるという認識が示された。また，経済的にも精神的にもどちらかだけに依存するのではなく，お互いが苦手を補い成長できる関係の実現への前向きな意思が見られた。【趣味を共有する喜び】にも触れ，「（交際相手が）自分が持ってないものとか，興味があることっていうか。そういうの知れるのもいいなって思ってて。」(C)，「相手がいるから……色んな楽しみを共有できるところはあるのかなって。趣味が共有できれば……ですけど。」(D)，「どうだろうね……でも今自分がやってることに対して（中略）それも巻き込んじゃえっていうのもあるけど。家族ごと巻き込んでしまえって言う。そういうのもありなんじゃないのって（中略）それは遊びにしろ何にしろ，自分でやってることを家族ぐるみでやれるようになれれば，もー全然。いいよね。」(H) といった，自身のやりたいことを相手と共有したり，相手の趣味や嗜好を知ることで新しい発見があるのではないかといった，趣味の広がりと共有についての前向きな様子がうかがえる。そして【価値観を合わせて行く結婚】として，「具体的に直面したら問題になるのかもしれないけど，（価値観を押しつけられることが）あったらあったでその時点でやめてる気がする。付き合い自体。そういうところが見える人とは付き合わないかな。それも含めての価値観。じゃあ一緒に乗り越えようよってなるのか。押しつけられるのか……押しつけてくるような人なら絶対ムリだと思うし。」(F)，「まあ自分の思いだけでは（色々なことが）出来ないだろうから，それは相手の人がどういう人なのかっていうのに併せて作っていくって言うか。すごい優等生的な発言になるけど。相手と創り上げていくものっていうか。自分がどうこうっていうより。」(H) といったような，夫婦の関係性を良好に保つためには，お互いに折り合いをつけ，価値観を押しつけることなく尊重しながらも共有できるのかが重要であると考えている。「そうだね，なんか……こう，図で言うと……私の世界が丸で

あるとして，相手の世界も丸である。その重なった部分が結婚って部分でもあって。まま，全部個々だし，全部染まるのも嫌だけど，ちょうど重なった部分がバランス良く，その，50：50であるくらいの……。って，分かりますかね？この説明で。そういうのがなんか，理想ですかね。重なってるところは価値観が一緒だったり，好きな物が一緒だったり。あとは補い合えたり……。そういうのが私としては理想の結婚っていうか。」（A）といった，ベン図のようなイメージで理想の結婚を語る様子もあった。自分の思いだけではない，また，全ての価値観を共有するのでもない，二人に合わせた新しい価値観を作っていく作業を経て，共に様々な障壁を一緒に乗り越えていけるのかが鍵となるという発想が見られた。

4. 社会の枠組みとしての結婚

結婚という枠組みにおいて，世間体や責任，不安の重圧を象徴的に表しているのが〈ステレオタイプ〉である。双方の家族との繋がりを背負う事に対する言葉が目立つ【当人同士だけではない結婚】では，親の介護，未知なる配偶者の家族の世話，自身が片親であることを理由に結婚後は親との同居を希望するといったバリエーションがあり，結婚へのハードルを高めうる不安が渦巻く内容である。しかし，大瀧（2016）は，親からの結婚期待に関し，結婚支援サービスを利用する確率を高める方向に効果を持っていたことを述べており，結婚への動機として考えた場合，阻害要因のみならず，促進要因ともなりうると考えられる。

【未婚の後ろめたさ】では，「現実に昔，アラフォーとかで結婚してない……その時自分の身近にいた人とかで，例えばテレビとかで見て，この人独身で，四十前後で……で，例えば人と違うところがあれば，だから結婚できないんだって思ったりとかもしてて，かといって何の悪びれも無く，そういう話題になるときもあるし……友達だったりとか，会社とかでも，あの人変わってるよねってなったら独身だしねみたいな。結婚＝選ばれる，みたいな感覚はあって。」（E）といったような，未婚であることが何か問題があるのではないか，結婚「できない」人なのではないかという周囲から，また自身が元々持っていたイメージについて挙げられた。結婚はきわめてプライベートな問題であることから，周囲から腫れ物を触るような扱いを受けた事に対する傷ついた経験，疑問を持った経験なども含まれている。これもまた，一方で結婚への動機としては阻害要因にも，促進要因ともなりうると考えられる。【結婚による責任と重圧】では，【妨げとなった子どもへの責任感】と同様，「ああ，そうですね。色んな制限が増えるかなって思ったりします。その，自分の行動に対して。そうですね……それは結婚……だけではないかもしれないですけど。誰かお付き合いしてる人がいて，それで制限が増えるっていう。そういうことだと思うんですが。やっぱり結婚して家庭を持ってってなると，よりなんて言うか。責任が伴うかなっていう。その責任を果たすために，色々と制限が出てくるかなって。」（M）といったような，結婚は「責任を負うこと」であるというバリエーションが多く見られた。また，「結婚……って，契約でしょうね。（中略）……一緒にいなきゃいけないよ的な……一生をともにする相手とか，思っちゃうんですけど。」（D）「（結婚はしてしまえば）結局はただの生活だから，そこに重きを置いてしまうと，のちのち大変にならないのかなとか。書類付きの，制約がつく生活，みたいなものだから。契約，みたいな。」（L）といった，「契約」という言葉が続く。過剰なまでに「結婚は責任を負うものである」と感じている様子が見受けられ，社会的責任や周囲からの圧力が生じることについての多くの不安が言及されたことは，未婚者が結婚を重責と考えている象徴的な事象ではないだろうか。また，【未婚者への圧力や世間体】では，まさに現在感じている圧力について語られる。「世間の目みたいなのは気になりますけどね。自分はしてないのは良くないんじゃないかっていうのはありますけど，今

はちょっと……っていう。」(D)，「親からはっきりと言われてるし。（中略）お見合いみたいな話とか。あとお金出すから結婚相談所入りなさいとか，かなり圧をかけられたりとか。（中略）なんか人になんか，多分，言われて，夏休みの宿題じゃ無いけどやれと言われたらほっといてくださいってなるあまのじゃくさもあって……」(E) といったように，周囲の期待に反し，必ずしも促進要因のみとしては機能していない。【旧世代的なイメージによる不安】では，女性は家で家事や子育てを中心に担うという旧世代的な考えが，結婚に不安を抱かせている様子があり，料理や家事に対する不安，結婚をしても仕事を頑張りたいという気持ちや，専業主婦について「時代に合っていない」と主張するバリエーションが見られた。結婚の意思決定に影響を与える要因として，水落（2010）は，男女間の賃金（収入）格差の視点に触れ，男性が労働市場での生産性（賃金）が高く，女性が家庭内での生産性が高いと仮定すると結婚のメリットが多く得られ，結婚を促進する効果が大きくなるとし，女性にとっての出産・育児に伴う就業中断などの損失を考えると，稼得能力の高い女性がその損失を受け入れて結婚に踏み切るには，経済力を持った男性が結婚相手として必要となると述べている。もちろんそういった社会的風潮は否めず，婚活において男性の収入は大きく注目される点ではあろう。しかし本研究においては，女性からの男性への経済力の期待はバリエーションとして見当たらず，むしろ，自らも家計を支える意思を持ち，自身も就労を続けることを前提とした語りが目立つ。一方で【経済力への不安】は主に男性から語られたことが特徴的である。自分の稼ぎで家族を養えるのかという不安，思うように賃金が上がらない社会情勢や経済状況を挙げ，もし結婚をしても子どもを育てにくい状況なのではないかという実感など，苦しい心情が吐露された。今回の調査対象者はいわゆる「ロストジェネレーション」と呼ばれる，他世代と比べ格差や負担を強いられている世代でもあり，ただ単純に定職に就いているかどうかだけが安心材料とはならない背景がうかがえる。

5. 新たな結婚の枠組み

〈周囲からの影響〉では，結婚のイメージがあくまで【離婚ありきの結婚】となってしまい，離別後のことを踏まえて結婚を捉える様子があった。「結婚式でお金かけても将来離婚したらその，もったいねえなっていうのがあって。まあそれはちょっと考えちゃいますね。……まあその，自分の中で離婚ありきみたいになってるところが，結婚のハードルをあげてるってところはまあ，少なからずありますね。うん。」(I)，「……なんだろうな，離婚が……離婚前提で話すのもアレだけど，離婚するのが面倒くさそう。普通に付き合ってるだけなら，あなたと合いませんさようならってできるけど，離婚ってなると両家巻き込んで大変なことになるから，あんまり好きじゃないけど一緒にいよう，みたいな。（中略）自由にその，選択が出来ないというか。離婚したくなったとき，自分が本当にしたいと思ってるように出来てない人もいるんじゃないかなって。」(L) といったような，結婚式は（別れることになった際に）お金が無駄になるのでしたくない，離婚したくなったときに大変そう，そもそも離婚しないような相手を望みたいなどといった，結婚の前にまず離婚を仮定して考えている様子がある。そしてこれも，親の離婚などの自身の養育環境からの影響が見受けられる。【友人の体験談からの抵抗】によっても周囲からのネガティブな影響が見られ，周囲の友人の離婚率の高さや，結婚後の生活の愚痴に対し辟易している様子があった。「私としては結婚して幸せだよー楽しいよーって話が聞けるのかなって思ってたけど，でもそうではなくて。相手のこんなところが嫌だとか大変とか，すごいケンカした話とか，そういうのが多くって。すっごく幸せすっごく楽しいって話してる人が浮かばないんですよね。うん。だから大変なんだなって思いがすごい強くって。あんなに結婚したい結婚したいって合コン

もすごい行って，色んな人と付き合って……ってやって。その人は（中略）結婚に憧れてたんですね。それでやっと結婚してどうなのかなって思ったらもうあんまり……みたいな。結婚あんまり良くないよ，みたいな人がいて。え？あんなにしたいって言ってたのにそれ？みたいなのが……あって。」（J）といったような，周囲から結婚への動機を持ちにくい状況がある。恋愛という双方の不安定な感情を拠り所とした結婚には「こんなはずでは無かった」という思いも生じやすいものかもしれない。事実，現在離婚は結婚と同様，身近にあるトピックスである。加えて，結婚の良さを多く語らない我が国の社会的風土による影響も考えられる。例えば「結婚は人生の墓場」等決まり文句のように述べ，自由になる時間もお金も限られていることをネガティブに語る未婚者を羨望する既婚者の言葉に，未婚者は日常的に晒されている。その実，多少の不自由や窮屈さはあったとしても，家に帰れば電気が付いていて，お帰りと迎えてくれる家族がいる温かさや，苦楽を共にするパートナーの存在に対するかけがえのなさについてはどうだろうか。2011年に東日本大震災が発生した際，にわかに結婚を意識する人が増え「震災婚」「絆婚」などの言葉が聞かれたが，このような大きな災害などが起こった際，一番に安否を確認し合い，支え合う存在がいることについての心強さを，未婚者に対してあえて語る既婚者は多くはないだろう。

善積（2000）は，日本の性別役割分業に基づく法律婚家族の優遇に対し，結婚のメリットが減り晩婚化が進むことを示唆した上で，欧米諸国の「皆婚社会」の崩壊について，結婚制度の量的なゆらぎだけでなく，結婚制度の存在意義の低下という質的なゆらぎも見られるとしたが，それは結婚制度の崩壊にむすびつくものではなく，「多様なライフスタイルの存在を前提とした制度を整えることによって，社会の秩序が維持され，むしろ結婚制度の機能が補完されている面がある。」と述べている。そして，同棲カップルを法的に保護することは，夫婦以外の親密な性結合関係を法律の枠組みに組み込み，社会秩序を安定したものにするとし，法律婚以外の親密なパートナー関係を社会的にも法的にも承認することが重要になるとしている。本研究においても，「（離婚を回避するための体力や時間を使うくらいだったら）そう，事実婚にして，やってみるっていうか。」（H），「（事実婚は）あー……まあそういうのもアリなのかなって率直に思いますね。その，（離婚にまつわる）ネガティブな要素が全部無くなるって言う感じがして。」（I），「（事実婚なら）あ，全然すると思う。それでいいんだったら。もっと楽な気持ちで行ける気もするし。」（L）などといった，【法律婚に縛られないパートナーシップ】を未婚者が検討していることが分かった。これは法律婚による縛られる感覚への抵抗感の強さを示すもので，相対的に事実婚との重みの違いを捉えたものである。つまり，未婚者にとっての法律婚のメリットが，デメリットとして想定されるものを上回っている現状が見える。よって我が国における法律婚へのハードルを下げることや，メリットを増やすこと，事実婚などの多様な婚姻スタイルの社会的受容や法整備が進むことの有効性が示唆される。併せて少子化対策には，親の負担感の軽減や子どもの福祉の観点からも，養育について法律婚や事実婚になどの婚姻スタイルによらない，子どもにとって遜色のないサポートを政策として打ち出すことが有効なのではないだろうか。

また，【生活の質の向上】では，既婚者からの話を聞き，家事の負担等は増えるものの，経済の共有により暮らしが豊かになり，今よりも生活環境が向上するのかもしれないというバリエーションがある。一方で今よりも生活水準が落ちる状態に対しては受け入れがたく，また，一人では起こりえない問題や障害も増えるリスクを予測している。つまり，結婚による生活の質の変動は日々のモチベーションになりつつも，一方で不自由も増えるのではないかというジレンマが語られた。

6. 未婚は選択されたものか

〈未婚を継続する現状〉は上述してきた事柄が複雑に影響し合った結果である。結婚の前に恋愛なのではないかという【恋愛ありきの結婚】では，「（結婚って前に恋人？）うん，結婚がしたいって言うより恋愛がしたい。結婚が目的じゃないから。結婚ありきじゃない。（中略）今そういう（恋愛のための）努力をしてないし。恋愛は努力が必要だと思ってるけど，今何の努力もしてないからね。努力しないと無理でしょう。平々凡々な会社員で。」（B）と，現在の主流である恋愛結婚へのこだわりを見せ，恋愛に対し楽しむ気持ちよりも，労力や努力を伴う交流といった意識を持っている。また，「結婚しなきゃ！みたいなところからはじまって……結婚ありきって言うのか。それこそ婚活アプリとか。そういうのはなんか違うかなって思うんだよね」（F）といった，結婚を主たる目的とした活動に対しての抵抗感も滲ませる。【積み上がる理想への逡巡】では，周囲からの影響に加え，自身が恋愛経験などを積み重ねたことで，相手への理想の条件も積み上がり，相手を決めかねてしまう様子が見られ，いわゆる「いい人がいない」の状況が作り出される。「婚活とかしてると，みんなある程度夢を見てるって思うんです（中略）王女とかでもないのに，プリンセス気質っていうか。いつか来てくれる……白馬の王子みたいな。現れる，みたいなのが，ないよねって言いながら心のどっかであったんです。多分。でも現実（婚活を）やってみて「現実ない，そんなの」って。だから今はなくて。プロポーズとか，絵に描いたような素敵な人が現れるだろうとか，そういうのはない。婚活始めた頃はどっかで「本当はいい人と出会えんじゃないか」とか，「いい人がある程度普通の人で良い」とかいいながら，高かったと思うんです。いい人のレベルが。」（C）と，そもそもの「普通の人」と「いい人」の条件や基準が現実に即したものではなかったのではないか，と改めて感じた様子があった。そしてそれを自覚していたとしても，「僕はこの人がいいな，好きだなって思う人じゃないと。（中略）結婚する意味は無いし最初からしない方がいいしって方が勝っちゃってるんだよね。やっぱ。」（K）と，結婚への動機は恋愛的な好意が大きく左右する様子は変わらない。

そして，「（結婚とは）ああ……うーん。幸せになることじゃないのかなあ……ないのかな……ハテナって感じ。」（A），「重要な問題って言うよりも，なんていうのかな，ふわっとした感じの。雲の上みたいな……漠然とした感じの。」（F）といった，【曖昧な結婚のイメージ】があり，実際の問題としては具体性に欠けるようであった。また，【婚活への期待と疲労感】においては，実際に相手を探した経験で思うように行かなかった様子，疲労感を募らせた体験などのバリエーションがあり，手段としての婚活は「アリ」として一定の期待感を持ち，あえて否定はしないものの，あくまで結婚への決定打となりうるものではなく，恋愛の相手を探すツールとしての位置づけであり，今実際に取り組むのかというと気が重くなる未婚者の様子が見受けられた。

このように，未婚者はあらゆる逡巡を繰り返しながら，最終的に大きな葛藤を抱えている。【不安を乗り越える経験値】によって，ある程度の独身生活，経験を積み自分を知った今，「結局のところ，やってみないと分からない」と前向きに結婚を考えられる側面がある一方で，結婚へ【向き合う余裕のなさ】によって，考えないわけではないが，今は真剣に向き合える状況ではないという状況に置かれている。「……とにかく面倒くさいなって気持ちが先立ちますね……うん……おそらく今結婚してない人ってそういう人多いんじゃ無いかなって私は勝手に思ってるんですね。余裕もないし。きっと面倒くさくて，あの，する義務もないし必要もないしっていう。」（M）といった，必要に迫られていない現状における結婚の優先順位の低下，「すごい昔の時は，結婚とかいつかするのかなみたいな感覚はありましたけど，年齢を重ねて，時間が過ぎていくと……あれ，なんか違

う。みたいな。」(D),「きっかけがある……ってわけじゃないんだけど，それこそ子どもの頃に自分が考えていた……大人になったら結婚して子ども産んでみたいなイメージと違うというか，あとは，自分の親の人生と照らし合わせたときにああ違うなあって。こうなるのかなってイメージとは漠然と，違うかなって。」(E) といった，以前は自然に（例えば進学や就職のように）いつかは結婚するのかなと考えていたものの，実際に年齢を重ねた今，あれこれと考えすぎてしまい，思っていたよりも結婚が難しいという現実に直面している。

今回の調査では，現在積極的に未婚を選択している訳ではないこと（結婚する意思があること）を確認したのちインタビューを行なったため，「結婚したくない」と露骨に表明する者はなく，むしろ結婚に対して前向きな発言は多く見られた。それぞれに様々な事情や経験，心情を抱え，複雑に行きつ戻りつする，結婚への意思や躊躇がそこにある。

つまり，結婚が自由意志に基づくものとなった今，未婚であることを自ら進んで選んでいるというよりは，様々な要因によって結婚に至っていない結果として，「いい人がいない」というざっくりとした言葉でしか自らの状態を表すことができないのではないだろうか。

例えば，「(結婚によって起こる不安に対して）それは経済的な助けであったり，場所的なものや，段取り的なものや。周りに要は先輩方がたくさんいるから，それはどんどん聞いていくのがいいんじゃないかな。家族が増えるって言うのは大変なことではあるけど。」(H) といった，自身の親や周囲の「人生の先輩」に，経済的，心理的援助を求める語りがあった。皆婚時代の世代の若者は，当時まったく不安を抱えていなかったわけではないだろうが（義務感すらあったとも考えられる），少なくとも今よりも結婚し子をなすことに対しての抵抗感は少なかったのではないだろうか。結婚も子育ても自由意志，自己責任に基づくものされ，核家族化が進む現代において，失った祖父母や地域等のサポートを担う社会的資源の整備は，未婚者の結婚後の不安の軽減に繋がると思われる。

7. 未婚者の声に触れて

今回のインタビューでは，自身が過去虐待を受けたエピソード等も聞かれたほか，現在社会問題となっている数々の虐待事件に触れ，その卑劣さを憎悪をも織り交ぜて語られた場面もあった。一方で，子どもを持つことを望み，自身は絶対に虐待をするような親にはなってはならない，自身が幼少期にできなかったことや，やって欲しかったことを子どもには叶えてあげたい，自分は子どもの気持ちにより添い，尊敬される親になりたいと熱を込めて語られたことも印象的である。

自身が親から受けた影響について，身を以て理解している未婚者は，子育てに対しての理想を「課題」に近いものとして抱き，また責任も重く捉えている様子が分かる。結婚を強く意識し，能動的に避けているわけではないと語り，まだ見ぬ結婚生活等に対しこだわりを持っている一方で，依然として未婚でいるという現状は，自身の幼少期や現在の社会的情勢などに対するアンチテーゼなのかもしれない。

本研究において探索した未婚者の結婚に対するイメージは，決してネガティブなものばかりではなく，将来の展望に期待をもつ，前向きなものが多く見られる。しかし付随する〈夫婦の関係性〉の変化に対する不安，〈子ども〉を持ち育むことへの躊躇，〈ステレオタイプ〉や〈周囲からの影響〉が，結婚への意欲に影を落とす。そこには真摯に将来に向き合うからこそ抱くジレンマが存在する。「馬には乗ってみよ人には添うてみよ」ということわざのように，多少のリスクに目をつぶり，勢いで結婚をするようなことを彼らは避けている。様々な状況を想像し懸念することが，結婚へのハードルを上げていることを自覚しながらも，思い悩む姿が浮かび上がる。将来に対する孤独や不安，あるいは一種の憤り等を胸に秘めながら，自立した日常を生き抜いている未婚者の現状が，本研究を通し

て明らかになった。

結婚への期待を上回る大いなる不安を抱いている未婚者の心に対し，丁寧に寄り添い，傷ついた過去の体験を癒やす心理的なケア，時代の移り変わりにより失った社会的資源の再構築，多様で柔軟なパートナーシップの受け入れ等が有効に働くことも想定される。

そうして阻害要因が抑えられ，促進要因として経験値が上回った際には，結婚という決断を下すことができると考えられる。

Ⅴ．本研究の課題

本研究で得られた結果や考察については，あくまでひとつの可能性について言及したものである。研究対象者が縁故法で選ばれたごく少数の人々であることから，対象者の偏りは否定できず，本研究で得られた結果をこの年齢層の日本人全体に一般化することには限界がある。また，性差や細かい年齢層を意識した分析は行なっておらず，交際相手がいるのか，同居家族がいるのかも考慮から除外している。

本研究から示唆された，養育環境，過去の交際経験の有無，雇用形態などの経済面，一人暮らしの孤独感や快適さなどを加味した質問紙などを使用した規模の大きな調査による裏付けも重要であると思われる。

引用文献

伊藤嘉奈子・新井邦二郎（2015）結婚観・子ども意識・子育て意識に影響する要因の検討　東京成徳大学臨床心理学研究，15巻，pp. 19-27.

岩間明子・大和礼子・田間泰子（2015），問いからはじめる家族社会学――多様化する家族の包摂に向けて，有斐閣 pp. 49-73，137-164.

岩澤美帆（2002）近年の期間 TFR 変動における結婚行動および夫婦の出生行動の変化の寄与について，人口問題研究，58巻3号，pp. 15-44.

改発有香・向後千春（2018）大学生の結婚観と結婚式観における家族環境との関連性 日本心理学会大会発表論文集 823．社会，文化 1EV-010 pp. 103.

木下康仁（2007）ライブ講義M-GTA：実践的質的研究法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて，弘文堂.

国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター（2017）「若者の結婚観・子育て観等に関する調査」報告書.

国立社会保障・人口問題研究所（2015）第15回 出生動向基本調査.

厚生労働省（2018）人口動態統計.

森　香織・桂田恵美子（2017），両親の夫婦関係が子供の結婚願望に及ぼす影響について――両親の結婚生活コミットメント及び夫婦仲に注目して 関西学院大学心理科学研究，43巻 pp. 25-32.

永久ひさ子・寺島拓幸（2015）未婚男女における結婚価値と結婚活動，2015，文京学院大学人間学部研究紀要，16巻，pp. 63-72.

内閣府経済社会総合研究所（2015）少子化と未婚女性の生活環境に関する分析――出生動向基本調査と「未婚男女の結婚と仕事に関する意識調査」の個票を用いて.

西村　智（2014）未婚者の恋愛行動分析――なぜ適当な相手にめぐり会わないのか，経済学論究，第68号3巻，pp. 493-515.

大瀧友織（2016）配偶者選択における男性の結婚支援サービス利用，大阪経大論集，67号3巻，pp. 69-82.

斎藤嘉孝（2012）定位家族の親夫婦の関係性が若者の結婚への態度に与えうる影響――大学生を対象とした量的調査の結果より 法政大学キャリアデザイン学部紀要（9）pp. 369-379.

佐藤弘樹・永井暁子・三輪　哲（2010）結婚の壁――非婚・晩婚の構造，勁草書房 pp. 13-36，54-73，129-143.

総務省統計局（2015）平成27年国勢調査.

竹原健二・三砂ちづる（2006）「結婚観尺度」の作成，民生衛生，72（6）pp. 255-233.

山田昌弘編著（2010）婚活現象の社会学――日本の配偶者選択のいま，東洋経済新報社 pp. 32-38.

山内星子・伊藤大幸（2008）両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響――青年自身の恋愛関係を媒介変数として　発達心理学研究 第19巻　第3号，pp. 294-304.

善積京子（2000）結婚とパートナー関係――問い直される夫婦　株式会社ミネルヴァ書房，pp. 1-23，27-54，56-80.

Abstract

An Exploratory Study on the Image of Marriage in Unmarried Persons over Average Age for First Marriage

Fumiko Jingo

Japan has been facing a declining birthrate and an aging population, of which the increase in late marriages and unmarried people is regarded as the main cause. Previous research has shown that the causes are the decline in opportunities due to the decline of arranged marriages and other forms of marriages, women's empowerment and economic reasons, and a social climate of reduced pressure on marriage. Marriage support businesses in both the public and private sectors are flourishing, but there is still no halt to the trend of unmarried people.

In this study, the author investigated the image that unmarried people have of marriage to help clarify the psychological situation of unmarried people who passed the average age of first marriage according to demographic statistics (2018) and remain unmarried in spite of the intention of getting married. 13 unmarried people were interviewed in this study to capture the process and psychological tendencies of being currently unmarried.

As a result, the author found a variety of circumstances, experiences, emotions, and a complex back-and-forth willingness and hesitation to marry. In spite of a variety of hesitations, influenced by their own parenting history, pressure from others, loneliness, and expectations and fears for their children and partners, it was found to be possible for them to make the decision to marry when their own life experience was a facilitating factor and outweighed the other inhibiting factors.